

京鹿子

昭和二十三年九月二日創刊
字號 十六年一月一頁
通卷九五三號（每月一回）
發行所 鹿子祭特集編輯部
印刷所 鹿子祭特集印刷部



1月号

京鹿子祭特集

待春
丸山佳子

氏神に奉納樽は新酒の香

言葉にも体温ありて七五三

これ好日子亀をひろふ尾花みち

裸樹に波長を合せ小半日





峰もみぢ脇役杉が脚そろへ
どの幹にふれても春を待つてゐる
看板の美女は眠らず春を待つ
右向けと誰が言つても花八つ手
待春の息ふき拭ふ手鏡を
忘れたり忘れられたり十二月



清響集
その四十五

豊田都峰



夕すすきすすきまばかりを埋めはじめむ
柿落葉余白のことを思ひゐる
柿落葉山の日ひとつみちづれす
落葉して星への距離を知りにけり
神無月西なる雲の金のふち
冬はじめ径ゆるやかに曲りゆく

まぎれきて雑木紅葉にまぎれある
標的は今黄落の一樹とす
湖風の車懸りに大根干す
お火焚の山を消しゆく勢ひぶり
正面の座は一輪のお茶の花
冬木立遅るるもまた孤りなる
一枝さへあざむくことのなき冬日
枯れきりて雲の話へ耳立つる

秀華採集

川は河へ人はいっしか霧となり

坂本敏子

海道前師に次の作品がある。平成二年作。『花洛』所載。

水煙やそのうち人は渡り鳥

この系列の作品といってもよい。敏子作品は「川は河へ」と発展的に把み、そして「人は」と対照的に消え行くものとする。伝統とはこのように展開してゆくものである。

甲冑の眼窩の闇を葛嵐

井上菜摘子

満月が昇る鳥獣戯画の山

笠間圭子

菜摘子作品では「葛嵐」がよい。葛藤を匂わす。圭子作品は組み合わせが楽しい。三人三様の作法もまた楽しみみである。

鈴鹿 仁

恋塚三句

秋さぶの川音やはすものの影
恋塚に秋蝶のきて浮世ばれ
恋句もて一語をさがす秋の蝶
鴨の湖なれば自在の波遊び
ひとことの昨日を流す冬の雨
歳晩や「大將」呼ばれ財布の紐
初せりの濁^{だみ}声魚を生き返す

近 詠

宇都宮滴水

初 日 影

鶴の舞背負ひ切れない北の峰
あかときはいつもひんがし初日影
恵方みち音のあつまる燈のうら
冬帝や暦の端に触れてゐる
茎漬へ日矢ひとすぢの刻の過ぐ
立冬や紙のコップの固さにも
しがらみの杭とは知らず浮寝鳥

神麓集



赤とんぼ 森津 三郎
爽やかや記念時計が時報打つ
秋の川曲るあたりの斜張橋
玉すだれ有馬街道川越える
友引はなにかあるかも玉すだれ
飛行機の原型として赤とんぼ

秋 丸井 巴水

血の色を好む外科医を秋の野へ
同じ坂くだり差のつく秋の暮れ
どの顔で死ぬかセピアの石榴の実
意味の無い握手で別る濁酒
木の実踏む靴炸裂のひびきあり

夜 霧十二月号追記丸井 巴水

霧の夜はひかりを運ぶ河の上
看護師のねずみ走りや星ながる
あきざくら明日の風はなに彩に
自転車の籠の大根こちら向き
飛ぶ鳥を落とせず山は冬ざる

慶祝昭和八十年 竹貫 示虹
世間虚假唯物是真初明り
今朝もお茶飲めて新年おめでたう
初詣進化した猿しない猿
初鶏や川はきのふの水ならで
元朝のピタリと決まる風見鶏

雲は秋 北川 孝子

言ひ訳を聞き余しをり雲は秋
戻りにはいつもの会話遠刈田
天高し強運の肩とつれ立ちて
秋小寒寝ぐら探しの羽の音
ほのぼのの生涯たのめり石榴実に

台風 川崎 光一郎

神罰のやうな台風の矢継ぎ早
昇竜の相すがたさながら出水川
台風の落葉狼籍倒伏田
廃棄物の山なす公園台風禍
床板も干され台風一過かな

神麓集



宿^す運^くや無^ね月の窓へ燭二本
栗あまた拾ひ一夜の宿をとる
宿痾とも背山の律黄葉なせる
秋空へ彈丸の声合宿す
痴排時光宿禰ふたりが花野なか

断片は壺の肩衝ちちろ鳴く
窯変か有田の天へ秋の虹
ねこじやらし陶一片に韓の釉
片々に陶工の息水澄めり
垣積みの古窯片輝る秋の声

初鴨をいとしと思ふ水の距離
初鴨を濡らす江津湖の雨の糸
蓑虫に天地無用の糸いつぽん
粧ひて女人を拒む修験山
煙り吐く寝釈迦の山も粧へり

笠間圭子

色変へぬ松にとどける「高砂や」
産土伸は帝に在し実むらさき
茶の花や軍手を縁に和尚留守
自転車に空気を入る柿日和
小春雲おき唐橋のゆるき反り

高橋千美

海道賞受賞作品

鎌倉市

柴田朱美

既作

正月の点を辿つてゆくあそび
半眼のまま鼻になりすます
臘梅にまつさらな空落ちてくる

白魚を呑んで煙のやうに寝る
芹の村からだの水を韻かせて
朧夜の柱の無韻たのしめり
泰山木二階に来てから考へる

新作

新蕎麦や逢はねば人の老い易く
恕しあふまでの日月大根干す
朴落葉重き家紋をひきつげり

それつきりの遠雷眉を剃つてをり
ひぐらしのゆふべ片手に叛かれし
烏瓜夜陰にまぎれ糸を吐く
綿吹いてにんじんいろの回顧録

萩くぐる水のあとさき母がゆれ
秋黄蝶或る日家紋を抜けだせり
体内にけものみちあり後の月
水を吸ふ巨木のひびき鯛雲
あいまいな卒塔婆の卒塔婆の梵字鬼やんま
古代劇場銀河に懸ける縄梯子
向かうから胡桃鳴らして父が来る
冬瓜のとろみにからむえにしかな
身ほとりに菓の匂ふ良夜かな
絶頂にゐて不安なり裂け石榴
みみしいの耳が漂ふ瓢棚
葬列に案山子がまじる民話村

間引菜となつて器用に消されをり
葉掘る背骨に裸馬を奔らせて
落日へ奔りたくなる芒原
ざらざらのぬくもり母郷の朴落葉

主宰評

朱美俳句は少し作り過ぎる傾向があり、それは今回の応募作品にも見られたが、句材が広がったこともあり、従来とは違った展開を見せ始めた。京鹿子大賞を受賞、その実力の上についてその発展を期待、これが朱美作品であるというものをますます見せてほしい。

京鹿子大賞受賞作品

奈良市

沼田巴字

定家葛流水とめどなく鳴りぬ

名月や発心の杖もち歩く

海の日やゼリー掬へば海の色

紅葉忌あえかなる棘疼きだす

くらやみももう蛸には戻れない

京の露地ふかぶかもぐり鱧をくふ

凌霄花や少年性をもて余す

はてしなく遠く行くため木の実手に

自画像に山を副へけり夢二の忌

帰り花目鼻をうすく描いてみる

ねこじやらし学びて老を明るうす

熱爛や男が鳥になるために

初冬や鏡の瑕が磨かれて

たんぽぽや人流るれば雲止り

帰り花そのうち人は仙人に

石一つ立ちあがりたる朧かな

冬の雨象皮の粗さ言ふべきか

仏堂やうしろの正面夕ざくら

七種や老に足したる花人参

鳩啼いてざらざらしたるさくら薬

父らしくなるための日日冬木立

夏きざす鯉のごとくに父すこやか

なかなか人をゆるさず煮凝れり

夕風にはじまる行や杜若

涅槃図や嶺は夕日を差出せり

翡翠や紺碧の空欠くるなし

薄氷ねむれば風のゆらぎだす

禅寺はがらんどうなり若楓

死をいたむ色はみづいろ涅槃像

干梅や百重なすしわ母となり



京鹿子集

豊田都峰選

さるすべりびろろびろろと冒のもたれ

東京 坂本 敏子

川は河へ人はいつしか霧となり
らくがきのやうに水鳥沼晩夏

下町はがらがらぼーんと秋暗れ
とことこ歩き終点は桔梗

蝸の高さに水平線昏るる

ほんたうへ零れつぐ白さるすべり

甲冑の眼窩の闇を葛嵐

蒲の穂が逢魔が時を先に来て

耐震をはかられてゐる曼珠沙華

亀岡 井上菜摘子

満月が昇る鳥獣戯画の山

荒尾 笠間 圭子

満月や菩薩の腹に水が鳴り

落梨のごろごろ風は知らん顔

畦道を一揆の走る彼岸花

負けびいき南蛮櫓の赤くなる

奈落より這ひ上り来し葛の花

葛の花蔵王権現憤怒立ち

防人のゆきたる道や葛の花

戦争に踏みしだかれし葛の花

秋霖や齋壇にある酒二本（悼陽揚氏）

千葉 河内 桜人